

研究課題	総合的な探究の時間におけるオンライン外部評価システムの発展についての実践研究
副題	～地域大学生が探究活動を支援する「学生アドバイザー制度」の広がりを目指して～
キーワード	総合的な探究の時間 学生アドバイザー 高大接続 インタビュー
学校/団体名	公立群馬県立高崎北高等学校
所在地	〒370-3534 群馬県高崎市井出町 1080
ホームページ	https://takakita-hs.gsn.ed.jp/home

1. 研究の背景

高等学校の「総合的な探究の時間」では、「外部との連携の構築」として、地域にある大学等の高等教育機関との連携が期待されるなど、地域の教育資源などを積極的に活用することが求められている（文部科学省、2018）。そこで、本校では2年次の「総合的な探究の時間」において「学生アドバイザー制度」を創設し、地域の大学に所属する大学生を中心に学生アドバイザーを募集し、生徒の探究活動に伴走する外部評価システムを構築した。昨年度の実践研究では、生徒や大学生の振り返りを質的に分析することにより、学生アドバイザーによる支援が、探究活動の視野を広げつまずきの解消に役立っていること、大学生生活についての情報を知る機会となっていることなどが明らかとなった（群馬県立高崎北高等学校、2022）。

探究的な学びを進めていくにあたり、生徒がテーマへの興味・関心を維持し続けるためには、学習の方向性を示す、適切な専門家を紹介する、別の観点を示すなど、学習過程における指導者の適切な支援の必要性が指摘されている（高橋、2011）。探究的な学びを支援・促進するような教師の具体的な働きかけとして、「生徒の気づきを引き出す工夫」や「生徒の学び・やる気を高める工夫」があることも明らかになっている（石橋ら、2017）。しかし、一般的な公立高校では、多岐にわたる業務の中で、個々の教師が「総合的な探究の時間」の支援に充てられる時間は限られている。また、探究的な学習の先進校と一般校を比較したとき、「外部の助言者」を確保するという点において、格差が存在することも明らかになっている（蒲生、2018）。

以上より、本校のような一般的な地方公立高校においても、生徒と外部人材とを結びつける方法を早急に構築する必要がある。オンラインを活用しながら、探究活動を支援するシステムを広めることで、学習環境を整えることができると考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、オンラインを活用して大学生が探究活動をサポートする「学生アドバイザー制度」が他校においても実践できるよう、アドバイザー制度によってもたらされる効果と導入への課題を明らかにすることである。特に、生徒の学習過程を分析することで、大学生からのアドバイスが生徒の探究活動にどのような効果を及ぼすのかを考察し、よいアドバイザーの条件を具体的に明らかにする。そして、他校でアドバイザーを導入する際に乗り越えるべき課題も明らかにし、アドバイザー導入のための参考となるようにする。

3. 研究の経過

表 1 研究経過 (2022 年 3 月～2023 年 3 月)

時期	実践内容	評価のための記録
3 月 (前年度)	【大学生】アドバイザーの募集 (各大学への依頼・訪問)	各大学担当者の声
4/12	【生徒】高北ナビ (2 年生が 1 年生に探究テーマを紹介)	
5/12・13	【大学生】キックオフミーティング (オンライン)	アンケート (アドバイザー)
5/19	学生アドバイザー外部評価① テーマ設定について	
7/7	学生アドバイザー外部評価② フィールドワーク先選定	アンケート① (生徒)
7/12～15	【生徒】フィールドワーク (専門家インタビュー) アポ取り	
7-8 月	【生徒】フィールドワーク (専門家インタビュー)	
8/20	【大学生】アドバイザー向けオンライン交流会	アドバイザーの声
8/29	【教員】職員研修①島根大学准教授 中村怜詞氏	
9/8	学生アドバイザー外部評価③ 中間発表会に向けて	
9/15	【生徒・大学生】テーマ探究 中間発表会	成果物 (Google スライド)
11/10	学生アドバイザー外部評価④ 最終発表会に向けて 【教員】公開授業・学生アドバイザーを交えた研究協議会	県内の高校教員に向けたアンケート
12～2 月	【生徒】アクション (調査・解決・創出) 実行期間 【生徒】外部コンテストへの応募	アンケート②、インタビュー記録 成果物 (Google スライドや論文、外部 コンテストエントリーシート)
3/16	【生徒】探究最終発表会「未来を拓く展」(1・2 年合同) 【教員】職員研修②大阪大学教授 山下仁司氏	

本校は、「未来を拓く」生徒を育てることを教育目標としており、「進路指導と探究活動を融合させたキャリア教育の実践」ほか 4 点を重点目標に掲げ、4 年制大学進学を希望する生徒や保護者からのニーズに応えるべく教育実践を重ねている。「総合的な探究の時間」(あららぎ探究プラン)では、まず 1 年次に「探究型インターンシップ」での経験を通して、全員が社会課題について探究する。その上で、「Will (興味・関心)」、「Needs (課題)」、「Academic (学問)」という 3 つの領域を満たす探究テーマを生徒が設定し、2 年次の「テーマ探究」においてこれを探究する。その際、各分野における大学教授や企業、地域の専門家にインタビュー (フィールドワーク) を行い、調査・解決・創出のいずれかのアクションを実行することで、「未来を拓く」ための資質・能力を総合的に身につけていく (図 1)。

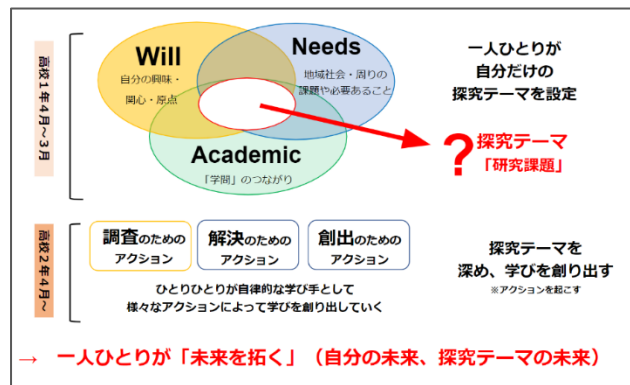


図 1 高崎北高校「あららぎ探究プラン」の概要

このうち、昨年度から導入した学生アドバイザーによる外部評価は、①テーマを設定する場面 (5 月)、②テーマに合ったフィールドワークを選定する場面 (7 月)、③中間発表に向けて準備する場面 (9 月)、④テーマ探究をまとめる場面 (11 月) で設定されている。

なお、外部機関との連携では、群馬県を拠点として高校生のキャリア教育を支援する NPO 法人 DNA からのサポートを受けており、「総合的な探究の時間」のカリキュラムを教員と協働しながら設計している。

4. 代表的な実践

(1) アドバイザーの募集とキックオフミーティング (3月・5月)

昨年度同様、連携する県内5大学を中心にアドバイザーを募集し、29名の大学生から応募があった。オンラインによるキックオフミーティングを開催し、外部評価の流れや、生徒の探究にアドバイスをする際のポイントについて紹介し、教員との目線合わせを図った。



図2 オンラインでの外部評価

(2) 大学生外部評価1～3回 (5・7・9月)

外部評価では、生徒をあらかじめ10人の班に編成し、その中からアドバイスを受ける5名を毎回選び、大学生と交流した。生徒は、2020年度に県立高校に導入されたChromebookでGoogleスライドを作成し、アドバイザーと事前に資料を共有した。当日は、まず生徒が画面共有をしながらアドバイスの欲しい点を伝え、アドバイザーは事前に準備した内容も含めて、生徒へのアドバイスを行った。



図3 対面での外部評価

大学生の参加状況は、遠方のアドバイザーについてはオンラインによる伴走が中心であった(図2)。大学生が来校できる場合は対面で実施し(図3)、外部評価の後にアドバイザー同士のミニ意見交換会なども設け、アドバイザーの不安解消も図った(図4)。



図4 アドバイザー同士の情報交換

(3) 第4回外部評価(公開授業)・研究協議(11月)

第4回の外部評価は、群馬県の進路指導部会の公開授業として設定し、県内約50校から参観者を集めた。授業後の研究協議会では、来校していたアドバイザーと参観者によるグループを複数つくり、意見交換を通して学生アドバイザー制度の可能性と課題について協議をしてもらった(図5)。



図5 公開授業における研究協議

5. 研究の成果

(1) 生徒アンケートの結果①②

生徒アンケート①②は、探究的な見方・考え方や、探究のスキルや態度といった資質・能力の伸びを見とるため、7月(n=207)と2月(n=206)の2度実施した。全体の傾向に大きな変化はなかったものの、「フィードバックをもとに発表を改善している」の項目では前後で有意差が見られ(p<0.001)、生徒の変容がうかがえる(図6)。また、学生アドバイザー制度に対する総合評価を見ると91.8%の生徒が「良かった」と回答していることから、今年度も多数の生徒が満足するシステムとなっていることが分かった。

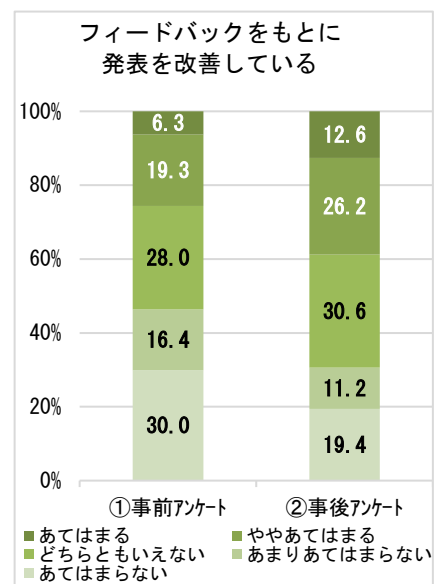


図6 生徒アンケート①②の比較

(2) 生徒アンケート自由記述のまとめ

アンケート自由記述の共起関係を分析したところ、「学生アドバイザー制度の良いところ」として、行き詰まったときに新たな視点を提供してもらえること、具体的な改善点を教えてもらえること、高校生に近い存在で明るく話しやすいこと、という3つの要素を読み取ることができた。

(3) 生徒へのインタビューとその考察

(2)の結果を受け、学生によるアドバイスが生徒の探究の過程で実際にどのように働いたのかを、さらに具体的に明らかにするため、探究の外部コンテストに応募した際のエントリーシートにおいてアドバイザーについて言及していた5名を選び、2023年2月下旬に半構造化インタビューを行った。

表2 生徒インタビュー結果

	探究活動における学生アドバイザーのアドバイスについての語り ※下線部は筆者
生徒A	…で、病気ってその時漠然と自然と病気って言っても何を調べるか分かんなかったんですけど、大学生の人が、病気は後天性の病気と先天性の病気みたいな感じで、どっちについて調べたいのって聞かれて、後天性の病気について一回調べることにしてみても、そうすると1回調べてみて、後天性の病気、患者さんってほとんど後天性の病気が多いんですけど、多くの患者さんと接してる看護師の人にインタビューをすることを決めました。(中略) <u>探究を私たちと同じようにやってきた学生さんだったので、すごい、何に詰まりやすいとか、どういうアドバイスをするとその先の探究に繋がるかみたいなのをよく知ってたので、すごいなんか身近、身近に…。私が詰まってるところ、なんかよく理解してくれてるなって感じで探究が進めやすかったです。</u> (中略) その探究アドバイザーさんだったら班に一人アドバイザーさんがいたので、 <u>大学生の方はその探究ひとつひとつの問いに対してすごい一緒に、すごい意見を考えてきてたり、色々なアドバイスがあったんですけど、(中略)何か探究に対して長い時間を費やしてくれましたので、大学生の方がその状況に応じてアドバイスをくれたので良かった、良かったと思います。</u> …
生徒B	…外部評価で、 <u>伝えたい人をもっと絞った方がいいって言われて。</u> で、その車椅子を調べてる時にパラスポーツの車椅子に興味があったから、対象を絞ってって言われた時にパラスポーツのことについて絞って探究しようかなって思った。 <u>最終アクションでポスターを作ったんですけど、それを2枚作って、健常者に向けたのと障害者に向けたので作るときに、伝えたい人を、対象を絞ってと言うか、そのポイントを思い出してと言うか。</u> (中略)良かったところは、やっぱり新しい視点をもらったことで、探究する、なんかどう探究していったらいいかわかんなかったけど、インタビュー先とかの提案してもらってそれをきっかけにインターネットで調べてみたりとかで、 <u>探究のやり方みたいなのを教えてもらったのが良かった点。</u> 緊張するタイプなんで、1回じゃ…その、初対面の人じゃないですか。だから緊張してるから、紙とかデータとかでもらえたら嬉しいなって。…
生徒C	…一番最初のアドバイスので、最初に発表した時に気になるところがあるって言われて。(中略)「 <u>ルッキズムっていう言葉が当てはまると思うから、そういうのも加えて調べてみるといいと思う</u> 」って言われたんで、その時にはルッキズムっていうのは聞いたことあったけど、意味もちょっとなんだろう、はっきり自信持って言える感じがなかったので、なるほどなと思ってそれで調べて、 <u>確かにあったので取り入れることにしました。</u> (中略)なんか班の人とか誰も専門じゃないことに関しても、また別の視点から多分いろんなことを提案してくれたり、ここがいいよっていうの褒めてくれたりして、女性の方だったんですけどすごく優しくてやりやすかったです、話しやすかったです、私は。…
生徒D	…結構なんか、自分の探究に特に何かあまり指摘されることがなくて。それで、自分の今までの見てもらったのは、FM 群馬に訪問したところ、その、夏休みフィールドワークまでのところなんですけど、 <u>自分でアポを取って具体的に考察立てててすごいとか、あとはスライドのまとめ方みんなには結構言ってたんですけど、この班みんなすごいねとか、すごい褒めてくれたりとか。自分の探究を認めてくれてるっていうのがすごいわかったの。</u> (中略)認めてもらえる感じがしてすごいいいなと思って、何でしたっけ、すごいいいなと思って、 <u>自分が行きたい志望校の人だったんですけど、それでなんか、こういう人になりたいなっていう感じも得られたし。</u> …
生徒E	…アンケートとか実験通して、 <u>考えなきゃいけないかった時に、高校生でここまで広げちゃうと趣旨が変わってきちゃうよとか、そんなに広げるとまとめが大変になっちゃうよとか教えてくれて、それを考えてくれた時は自分で思いつかなかったこととかも結構言ってくれたりしたのですごい助かりました。</u> 本当にその、アンケートの時とかも、(中略)あとこういうことも調べてみようっていう時に、 <u>方向性がこっちであってるか、それともこっちで合ってるかとかあとはその行き過ぎてないかっていうのも学生アドバイザーのアドバイスで修正することができたっていうような、そういうような話ですよ。それはすごくありがたいですよ、学生アドバイザー。</u> …

生徒Aは、インタビュー先の専門家を選ぶ際にアドバイザーの提案が役立った例である。この生徒は、「病気に左右されない！ 過ごしやすい社会の実現へ」を探究テーマとして、アドバイザーのアドバイスをもとに看護師の方にインタビューを行い、図7のスライドをまとめた。探究を実際に経験していたアドバイザーが、生徒のつまづきやすいポイントを把握して、一緒に考え、適切なアドバイスをすることによって、生徒が探究的な学習を前に進めている様子が見えてくる。

インタビュー内容②

Q病気（精神）について主にどのような相談を受けるか。
 治療が辛いので一向に効果が出てこないならやめたい。 ご飯がうまく食べられない
 早く家に帰りたい（家に認知症のおばあちゃんがいる） 治療の相談 チーム医療で解決する

図7 生徒Aのスライド

生徒Bは、最終成果物にアドバイザーの提案が役立った例である。この生徒は「対象を絞る」というアドバイスから、パラスポーツの普及に向けた2枚のポスターを実際に作成している。

生徒Cは、探究内容にかかわる知識の面で、アドバイザーの提案を受けた事例である。この生徒は、自身のこれまで実体験から「人の目を克服するにはどうしたらいい？」という探究テーマを設定した。当初は、自身の関心や探究の方向性をうまく説明できずにいたが、アドバイザーから示された「ルッキズム」という概念を手がかりに探究を前進させた。

Qルッキズムの考え方が高校生に与える影響はなにか？
 A高校に入学したり思春期に入ってくるとルッキズムが強くなる
 ⇒1つの側面でいうと、成長の証
 顔つきなどを他人と比較して、「背が低いな」「太ってるな」と思うのは自分が見えるようになってきてる証拠（生理的発達）
 自分を見つめ始めたときに、他人と比べるようになってくる（友達と、兄弟と、親と、先生と.....etc）
 ⇒客観的に自分を見つめる力がついてきた
 （人間の一生の発達という面で見るととても大事なこと）

図8 生徒Cのスライド

最終的には、テレビ等で活躍する著名な教育評論家へのインタビューを実現させ、ルッキズムと学校教育について情報を得ることができた（図8）。

生徒Dは、情報の収集や整理・分析を自分自身の力で行うことができる生徒で、「論理的コミュニケーションスキルを身につけるには？」という探究テーマを設定していた。この生徒は、夏休みのフィールドワークで地元のラジオ局に訪問することができ、ラジオのパーソナリティの方にインタビューをする過程で、ラジオ出演をする機会を得た。生徒Dの語りを見ると、こうした学びの過程をアドバイザーから「認めて」もらったことに大きな喜びを感じている様子が分かる。

生徒Eは「代替食品を通して健康な身体と地球環境を守るには？」という問いを設定し、探究活動を進めてきた。前述した生徒Aと同様、アンケートや実験の手法といった探究の学びの進め方について、アドバイスを受けたことが印象に残っているようである。

以上の考察より、学生アドバイザーのアドバイスが効果的なものとなるためには、探究学習を前に進めるための方法を提示したり、アドバイザー自身が一人一人の探究の内容にまで寄り添って知識を提示したり、生徒の探究の成果をなるべく具体的に評価して自信を持たせることが、生徒の探究学習の成果に結びつくことが明らかとなった。したがって、アドバイザー制度を導入する際には、事前にこのような点を大学生に意識させ、ガイダンス等を行うことが有効である。

（4）教員アンケート自由記述のまとめ

一方で、公開授業に参加した県内の教員のアンケートを見ると、「志願して来られている学生アドバイザーの方々のモチベーションの高さは 利点だと感じました」としながらも、「自分の専門分野でなくても、きちんと下調べをして、本番にそなえているとのことであった。ただ、そうした苦勞を引きうけてくれる学生もいる反面、この大変さを知る学生には少しハードルが高い部

分があるかもしれない」といった、アドバイザー側の負担を指摘する意見が多かった。「県中部の高北さんでさえ、集めるのに苦労しているとなると、東毛では難しいと考えてもいる。OB・OG 募集も、考えていくとよいか（在学中に）」といった記述からうかがえるように、探究活動を高校時代に経験した卒業生が、アドバイザーとして活動することが、アドバイザーの質と人数を安定化させることにつながると考えられる。

6. 今後の課題・展望

前述のとおり、本校においても他校においても、熱心な学生アドバイザーを安定的に招聘し続けることが課題となる。今後の展望として、本校では卒業生調査と融合させた新たなアドバイザー募集体制を計画している。卒業生への定期的なアンケート調査により、大学において高校までの探究的な学習が役立っているかを調査すると同時に、アドバイザーとして参加する学生側のインセンティブを明示した上で、アドバイザーへの募集を継続的に行っていく予定である。これによって、実際に探究活動を経験している大学生が、アドバイザーとして継続的なアドバイスを提供できる体制を構築することができると考える。

7. おわりに

本研究は、学生アドバイザー制度に協力していただいた各大学、丁寧な指導を積み重ねてきた学生アドバイザーの皆様のご協力によって形づくられている。パナソニック教育財団からも多大なるご支援を賜った。心からの感謝を申し上げたい。

8. 参考文献

- 石橋太加志、沖濱真治、井上享子、檜府暢子、秋田喜代美、小国喜弘、恒吉僚子（2017）「探究学習を可能にする教師の指導・支援のあり方についての一考察：附属中等教育学校の卒業研究に着目して」東京大学大学院教育学研究科紀要 57、pp.477-492
- 蒲生諒太（2018）「全国高等学校『探究的な学習』に関するアンケート調査：探究先進校と一般校の比較検討」教職課程年報 1、pp.44-62
- 群馬県立高崎北高等学校（2022）「総合的な探究の時間『あららぎ探究プラン』における『深い学び』を支援する実践研究：『生徒の探究活動を支援するオンライン外部評価システムの構築』を目指して」第47回パナソニック教育財団実践研究助成研究成果報告書
- 高橋亜希子（2011）「高校生の総合学習への取り組みの分化の要因：学習過程に即した質的・量的検討」教授学習心理学研究 7（2）、pp.56-69
- 文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領解説総合的な探究の時間編』